

六 天の川

現代の和歌

佐佐木信綱

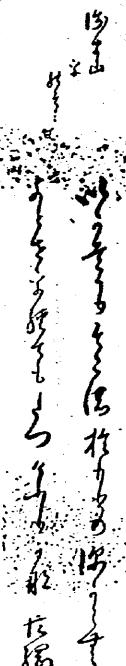
三重縣の人、明治五年(二五)生、文學博士。

浅ま山をのぞみて

いかばかりそこのおもひの深かちむ千とせを経てもたつけぶりかな

信綱

天の川さやかに澄みて遠蛙鳴く音したしき夜ごろとなりぬ



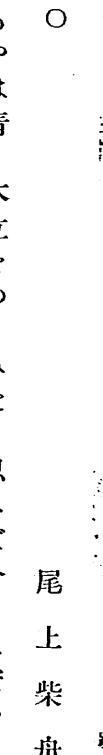
跋筆綱信木佐佐

尾上柴舟

名は八郎、岡山縣の人、明治九年(二五)生、文學博士。

ゆふもやは青く木立をつゝみたり思へば今日は安か

りしかな



釋道空

本名は折口信夫、大阪市の人、明治二十年(二五)生、文學博士。

○

釋道空

葛のはな踏みしだかれて色あたらしこの山道を行
し人あり

○

北原白秋

北原白秋
名は隆吉、福岡縣の人、明治十八年(二五)生。

おのづからうら寂しくぞなりにける稗草の穂のそよ
ぐを見れば

北原白秋
やしの實のからにいれたる茶の花のほのかにしるき冬はきにけり

跋筆秋山原北

齋藤茂吉

山形縣の人、明治十五年(二五)生、醫學博士。

齋藤茂吉

うちよせし波のしらあわ消ゆる音岩間にひゞき日ぞ

眞畫なる

○

雀田空穂

雀田空穂

名は通治、長野縣の人、明治十一年(二五)生。

雀田空穂

佐佐木信綱

三重縣の人、明治五年(二五)生、文學博士。

○

天の川

春のあめ降るとは見えぬ楓葉の葉にしづくたまりて
静かにこぼる

金子薰園
名は雄太郎、東京市の人、明治九年(一九〇七)生。

○ 武藏野のかぜの夜に来て落葉のさびしき音を聞きつくしきり

社頭雪
みづ垣に淡雪かゝり神殿のおくすき園

前田夕暮
名は洋造、神奈川縣の人、明治十六年(一九〇三)生。

古泉千櫻
名は幾太郎、千葉縣の人、昭和二年(一九二七)生。

○ 前田夕暮

ひまはりは金のあぶらを身に浴びてゆらりと高し日の小ささよ。

○ 古泉千櫻

ひまはりは金のあぶらを身に浴びてゆらりと高し日の小ささよ。

金子薰園

鹿野
千葉縣の西南部にある山。

結城哀草果
名は光三郎、山形縣の人、明治二十六年(一九〇三)生。

○ 降りすぐる夕立雲はいや暗く鹿野のみやまをおほひけるかも

結城哀草果

奥謝野晶子
堺市の人、明治十一年(一九〇九)生。

今井邦子
名は邦枝、長野縣の人、明治二十三年(一九〇一)生。

岡本かの子
東京市の人、明治二十六年(一九〇三)生。

○ 金色のちひさき鳥の形して銀杏散るなり夕日の岡に
○ 細やかに散りゆく庭の萩もみぢ目に立たなくにあはれ散りしく

奥謝野晶子
今井邦子

岡本かの子
名は邦枝、長野縣の人、明治二十三年(一九〇一)生。

○ わがいのち寂しけれども白梅のはな咲くはるにまた

岡本かの子

逢へりけり

○

中原綾子

中原綾子
長崎市の人、明治三十一年(一八九八年)生。

板倉重宗

京都所司代たる
こと三十餘年、承應三年(一三三四)
秋、年七十一。
湯浅常山
名は元頼、岡山藩士、江戸時代の儒者、天明元年(一七八一)秋、年七十四。

職
京都所司代をいふ。
父子
勝重と重宗。

愛宕山の神
山城國葛野郡愛
宕山上にある愛
宕神社の祭神、及
即ち伊弉母尊及び火產靈命。

○松本風湖
名は敬忠、美城
縣の人、邦畫家、大正十三年(一九二四年)八十五。